

では、それは何時なのか。正確には誰にも分からないことですが、多くの情報は、今世紀の最後までに「地軸」の変化が起こるであろうことを暗示していました。ところが、いよいよの土壇場になって、「懸念された事態」（急激な変化）は回避されたのではないのでしょうか。この情報はまだ殆どありませんが、多くの「マスター」（かつて地球をマスターして、今地球の指導に当たっている者）と交信するキヨ・ササキ・モンロー女史は、「クリスタルの階梯」の監訳者でもあるので、サナンダに直接尋ねたそうです。すると、人々の意識に変化が起きたために、地軸の急激な変化は避けられ、「ソフト・ランディング」できるだろうと、「救出計画」の大幅な変更を伝えられた、ということでした（同女史の「愛と希望の讃歌」）。それは、「ワンダラー」にとっては正に「大勝利」と言えるでしょう。何しろ、地球に関しては過去六回も「転換」（二万六千年毎のステップ・アップ）に失敗して、今回は最後の七回目に当たり、絶対に失敗できないと言われていたのですから。しかも、これほど急激な「大変革」は前例がなく、非常に危険だったのです。

締めくくりに、再びランボオに戻ります。今や彼が何者かは自明でしょう。彼は先の「神」の言葉、「我いま新しき天と、新しき地を創造せんとす」を受けて、《J' ai essayé d'inventer de nouvelles fleurs, de nouveaux astres, de nouvelles chairs, de nouvelles langues》:「我は新しき花と、新しき星と、新しき肉体と、新しき言葉をば作り出ださんとしき」と、自分も同じことを試みたことを、「地獄時代」の最後の「訣別」の中で打ち明けたのでした。しかし、彼は間違えたのです。何をか。その時の彼は、「先発者」として地に出たのですが、記憶を失ったために、「後発」と間違えたのです。その結果、「ハムレット」だけ「アセンション」して、「オフェリア」は残ってしまいました。しかしながら、それもまた「計画」のうちで、その短い生涯（十九歳）は、本当は本番の時の「橋頭堡」（ベース・キャンプ）だったのです。「後発者」は、何としても自分の「オフェリア」を連れて帰らねばなりません。

以上のように、本論は一言で言えば、「天使」とはどのようなものかを明らかにすることによって、何よりも重要な「メッセージ」を伝えることを目的としました。「頭」ではなく、「心」で理解して下さい。どんな人でも、一メートルの「メジャー」で地球を計ることは出来ないのです。最後に、もう一度言いましょう。「天使」とは何か。「眠れる天使よ、それはあなたのことです。」

平成十一年九月記す

abandonné; deux femmes seront en train de broyer au moulin à bras : l'une sera prise et l'autre sera abandonnée. Restez donc aux aguets, car vous ne savez pas quel jour votre Seigneur vient》:「その時、男二人野にあらん。一人は取られ、一人は残されん。女二人臼で粉を挽きてあらん。一人は取られ、一人は残されん。それ故見張りてあれ。何となれば、汝ら「主」の来る日を知らざればなり」(「マタイ伝」二十四章四十節から四十二節)。そして、これと同じことが、先の「霊界物語」の中でも、「神の御綱」とか「救いの鉤」などの象徴的な形で起きたのです。ただし、以上のことは、「神」やイエスが自分の考えで或る者は救って、或る者は見捨てるということではありません。本当の「神」が自分の考えで依怙ひいきをすることなどは、全くあり得ないのです。宗教の「神」と違って、本当の「神」は怒りません。従って、「裁き」はないのです。「救い」を望めば救われ、望まなければ残ることになるでしょう。宇宙の中で、ここは「自由意志の領域」なのです。

そこで、いよいよ最後の問題に入りますが、この「携挙」といい、「地球」の大変化といい、一体何が起ころうとしているのか。それが、最近知られはじめた「アセンション」(ascension)と呼ばれる現象なのです。訳せば「上昇」であり、先に見たように、キリストの「昇天」でもあります。では、どこへ「昇る」のか。しかし、それは場所ではなくて、「次元」の「上昇」を意味します。つまり、「人間」も「地球」も、この三次元の「物質世界」から五次元の「半霊半物質世界」へ移行するのでして、それが今回の「大周期」のステップ・アップなのです。そして、イエスは「復活」と「昇天」によって、最初にその道を切り開いたのでした。《Je suis le chemin, et la vérité, et la vie. Nul ne vient au Père que par moi》:「我は道なり、また真理なり、また命なり。何人も我を通さず『父』に至ることなし」(「ヨハネ伝」十四章六節)。現在、「サナンダ」と呼ばれる者が全体の総指揮を取っていますが、かつての「イエス」本人だと言われています。そのサナンダの命を受けて、エリック・クライン氏が「アセンション」についてのメッセージを「受信」して、それを人々に伝えました。それが先ほどの「クリスタルの階段」(アセンションのこと)です。「それ(今起こりつつある変化)は地球自体が五次元生命体へアセンションするために変革の胎動を起こしはじめているからです。三次元的な今までの社会制度はまもなく終わりを告げるでしょう。今あなた方が住んでいるこの地球と太陽系全体に、想像を超えた大変革が起きるのです。この地球の構成要素である原子や分子からはじまって、地球上に存在するありとあらゆるものはより高い波動へと変容し、まもなく太陽系ごと五次元へ移行します」(サナンダの言葉)。

す。しかしながら、彼らも他の者と同様に、生まれる時はすべてを忘れねばなりません。しかも、地の低い「波動」に包まれて、目覚めることは至難の業となります。また、たとえ目覚めても、一人で一体何ができるのでしょうか。そのような中で、一人一人の捨身の努力の末に、遂に火は点火されたのでした。個々の「ワンダラー」に興味がある方は、スコット・マンデルガー博士の「宇宙人の魂をもつ人々」を参考にして下さい。彼が各地の「ワンダラー」にインタビューして、それに基づいて博士論文を書いて、それを更に一般向けに発表したものですが、最後に、自分自身も「ワンダラー」であることを明らかにした「勇気の書」です。なお、日本の「ワンダラー」には特別な使命があって、その活動の足跡を記録したものが渡辺大起氏の「オイカイワタチ」（全五巻、非売品）ですが、一般向けに要約したものが「宇宙からの黙示録」の書名で出版されました。それから、「ひふみ神示」の「人民に特別な通信をなし」ですが、このような異なる次元からの「通信」は、神道では古来「神懸」（しんけん）と呼ばれています。近年では「チャネリング」（受信者は「チャネラー」）の名称で一般化したために御存知の方も多いと思いますが、人間はすべて、本源からの「チャネリング」なしには生きられないそうです。

ところで、今回の地球に関しては、大きな問題がありました。と言うのも、最後に「地軸」が移動するときに、急激に起る可能性が大きく、それは避けがたく思われたからです。そこで以前に紹介した「黙示録」の、「空の星々は地に落ちぬ。あたかも、いちじくの木が、大風に吹かれて、その青き実を振り落とすが如し」（六章十三節）のような、「警告」のイメージが伝えられたのでした。その時に備えて、「天」では地球全体を無数の「船」で覆って待機することになりましたが、その「船」を指揮しているのが、後出の「サナンダ」の右腕と言われる「アシュター」です。彼は、「クリスタルの階梯」の中で、「私たちアシュター船団は高次元波動でつくられた宇宙船で、全銀河系宇宙を自由に行き来しています」、「私たちは地球と地球上の人々の意識の進化を助け、それを見守る使命を持って、数千年前からここに来ているのです」、「私たちの高度な科学技術の例として、マーカバ（メルカバの英語読み）と呼ばれる異次元空間を行き来できる宇宙船、即ちエーテル体の飛行物体があります。今、地球のまわりは宇宙船団でいっぱいです」などと述べていますが、この「メルカバ（マーカバ）」はどこかで見た名前ではないでしょうか。そう、古代の「戦車」をヘブライ語で「メルカバ」と言ったのでした。そして、以上のような「救出作戦」をカトリックの方では「携挙」と呼んでいます。勿論それが何かは誰も分からなかったのです。ただ、聖書には、こう書かれていました。《Alors, deux hommes seront aux champs : l'un sera pris et l'autre sera

さしかかっています。これら三つのサイクルのそれぞれが、歩調を合わせて同時期に螺旋のダンスの最後のステップを踏み終えようとしており、この時期を非常に重要な変遷期にしているのです」(鈴木純子訳「プレアデス 人類と惑星の物語」)。私たちの銀河系の構造は、地球の科学ではまだよく分かっていませんが、銀河の中でこの太陽系がある領域の中心星は、プレアデスの「アルシオーネ」だと言われています。そして、地球の太陽がこの中心星を一周するのに二万六千年かかること。また、その全体が銀河の中心を回るのですが、その為には約二億三千万年かかること。最後に、その銀河系全体が、今度は「大いなるセントラル・サン」(「すべてなるものの大いなるセントラル・サン」)と呼ばれる中心を無限とも見えるほどの周期でめぐっていること。これを「三つのサイクル」と呼んでいます。なお、「無限とも思われる軌道周期」とは、具体的には「数十億年」だそうで、これは地球の年齢に当たるのではないのでしょうか。どうやら、地球はその誕生以来はじめて宇宙の中心を一週する時を迎えたようです。そして、宇宙の運動はすべて螺旋状になっており、一サイクルが終わると、一段階ステップ・アップしますので、これを「螺旋のダンス」と言った訳です。ただし、人間の意識の進化が遅れた場合は、この「ステップ・アップ」が起こりません。「ワンダラー」が活躍するのは、この時です。

なお、元の引用文中に、「この太陽系でまたもや破滅が起ころうとしている」(傍点は筆者)とあるのは、かつて火星と木星の間にあった「マルデク」という惑星が破壊されたことを指しています。その残骸が「アステロイド」(小惑星帯)であることはよく知られていますが、念のため。

では、「ワンダラー」の話の続きですが、彼らは何時から地球での活動を始めたのでしょうか。再び、ウィリアムソンに戻りましょう。「その地球での働きたるや、一代や二代前から開始されたものではなく、遙かに数百万年前の昔、中新世までさかのぼるのだ！」かつて地球には、今以上の文明が幾つか存在したと言われています。そして、二千年前にイエスが地球上に降りた時は、もはや最後の一目盛りを残すのみでした。それが「魚座」の二千年であり、初期のクリスチャンは、それ故「魚」を目印にしたのです。

それから二千年後の今現在、一千万から数千万の「ワンダラー」が出ていると言いますが、先の「ひふみ神示」にも、「特別の使命を持つ天使は最下級の霊界まで降って来て、人民に特別な通信をなし、指示することもあるぞ。また天使の霊が母体に宿り人民として生まれてくる事もあるぞ、末世にはこの種の降誕人が沢山あるぞ」(五十黙示録 第四巻 龍音の巻)と記されています。それは、一言で言えば「百匹目のサル現象」を起こす起爆剤に外なりません。かくして、人間の意識の進化を飛躍的に高めて、宇宙の進化の波に乗せるので

の特別な集団であった。長老である“思念の子”と共に地球をおとずれた小アヴァタル、つまり靈魂は一四四、〇〇〇人にのぼるという。」もう既にお分かりのように、「神」の「思念」から「言葉」が生まれて、その最初の「言葉」が「イエス」でしたから、この「長老」はイエスその人なのです。つまり、今回のプロジェクトの「プランナー」はイエスであり、それ故彼が「チーフ」となりました。なお「アヴァタル」は「覚醒者」の意で、大アヴァタルのイエスに対して、彼等ワンダラーを「小アヴァタル」と呼んだ訳です。そして、この「一四四、〇〇〇人」は、聖書にも登場することになります。《Et j' ai vu, et voici l' Agneau se tenant debout sur le mont Sion, et avec lui cent quarante-quatre mille qui ont son nom et le nom de son Père écrits sur leurs fronts》:「而して、我（ヨハネ）は見たり。シオンの丘に「子羊」は立ち、また彼の名と彼の『父』の名を額に記せる十四万四千人も共にありけり」（「黙示録」十四章一節）。ヨハネの見た「子羊」（イエス）や「シオンの丘」（エルサレム）は誰でも分かると思いますが、「名を額に記せる」とあるのは、昔奴隷の額に所有者が自分の名前を書いた為です。ヨハネが見せられた「幻」は、他の個所でもすべて象徴のイメージでした。「黙示録」が難解とされる所以でしょう。

しかしながら、それぞれの「星」のことは、その星で責任を取るのが宇宙の鉄則です。彼等ワンダラーがすることは如何に善意であれ、一種の干渉であり、規則違反ではないのか。通常の場合は正にその通りなのでして、当人たちの学びの為には、絶対に助けてはならないのです。しかし、今回の地球の場合は、特別の事情があったのでした。その点についてもウィリアムソンは、ある人が「宇宙機」で地球を調査中の一人から受けた「メッセージ」を引用しています。「いま私たちは必要以上の干渉を行なっていますが、それは、この太陽系でまたもや破壊が起ころうとしているのを黙って見逃すことはできないからです。無益な破壊などを繰り返している時ではありません。“大周期”が終わりに近づき、私たちはみな新たな段階にはいるようとしているのです。」つまり、他の星も同じですが、この「大周期」の終りの時に、「ワンダラー」が活躍するのです。では、今回の「大周期」とは何を指すのでしょうか。この「周期」について、一番詳しく説明しているのは、アモラ・クェン・イン女史でしょう。彼女は、自分を指導する「存在」の言葉を、こう伝えています。「あなた方地球の人類は、二万六〇〇〇年という地球と太陽とプレアデスのサイクルの終わりにいるだけでなく、あなたがた太陽系を含むプレアデス星団全体が銀河の中心をまわる二億三〇〇〇万年の終りにおり、さらに天の川銀河全体が「大いなるセントラル・サン」をひとめぐりする無限とも思われる軌道周期の最終地点に

の力持ち、即ち高名なる人達なりけり」(「創世記」六章四節)。「ネフィリム」は、「倒す者たち」の意味だと言われます。つまり、神話の「英雄たち」に外なりません。彼らが「半神」と言われたのは、事実だったのです。

ところで、先ほどの「靈魂の大群」は、なぜ地球に来たのでしょうか。「移住者が地球を住家としたのは、肉体の段階での経験を積み重ねるためだった。人間は、シリウス太陽系から集中された念波により、修養のため苦しむ囚人として地球に送られたのである。」地球の太陽系は、シリウス系の一部と言われます。つまり、彼等は、そこから地に墜ちた「天使たち」なのでした。しかし、実は、それですべてなのではありません。元の「類人猿」と「移住者」以外に、「地球にはまだ第三のグループがあるのだ。それが“シリウスから墜ちた天使たち”を教え導いて神性と獣性を調和させ、もとの天使の姿にかえそうという大きな使命を帯びて地球をおとずれた“キリスト族”である。この第三のグループは、特別な靈魂たちから成る宇宙的集団なのだ。その名を“放浪者”という。」「移住者」については、その後シリウス以外の様々な所からも、大勢が学びに来ていると言われます。

しかし、彼ら「放浪者」は何故、そのような名称で呼ばれているのでしょうか。それを説明したのが、「第二章・放浪者(ワンダラー)」です。それは、「宇宙には、ふつうの人と異なって遊星から遊星へ、太陽系から太陽系へと移り歩く特殊な階級、集団の呼びとがある、という意味である。彼らは宇宙の“煙突掃除夫”なのだ。宇宙のごみすてのような遊星におもむき、墮落した同胞に援助の手をさしのべることが彼らの使命である。」では、彼らは、どのようにして地球に来て、どのような姿形をしているのでしょうか。「これらの放浪者が地球に来るのに、宇宙船を使ったのではないとすれば、いったいどうやって来たか? 地球行きを志願して、地球に生まれ変わったのである。」そうすると、今回の「地球」に関しては、誰が「救出プロジェクト」を立てたのか。それは、「神」自身なのでしょうか。ウィリアムソンはここで、「星からの客」という書物を引用し、そこで、「長老」なる人物に語らせています。「大変災」(ノアの大洪水)の後、「私は最初ある使命を帯びて地球に来た。主は、(今回も)善悪の知識を人間にはまだ知らせぬよう望んでおられたのである。人は獣として苦しみ、そして死なねばならぬ。故郷のシリウス太陽系に帰るのは獣の肉体が死んだあとのことである、と(最初の「エデンの園」を再現すること)。しかし私は、もっとよいと思われる計画を主におすすめた。人間の持つ獣性は、私の導きで清めてごらんにいれましょう。でもそれには、何代も何代も生まれては死に、生まれては死ななければいけません。」そして、「“思念の子”が(洪水後の)世を強化するためにはじめて地球に来たさい同道したのが、こ

して、一般の人々に対しては隠蔽工作を計りました。ところが、おびただしい数の目撃や、遭遇、コンタクトなどから、今では信じるか否かは、もはや問題ではなくなりつつあるのです。そして、多くの情報が伝える所では、「彼等」が人々の前に直接姿を現わすのは時間の問題で、さほど遠くないということなのです。それは、「地球」の受け入れ準備が整いつつあるということに外なりません。

そのような訳で、これまでは「宇宙人」などは笑い話でしかありませんでしたが、本当は、「地球人」自身も「宇宙人」であることを知る時が来たのです。そこで、同書「第一章・移住者」が始まります。

「地球はすっかり冷却しきって、植物や動物があらわれ、人類の出現を迎える支度はやっとできあがった。他方では遙かな空間の彼方から、私たちとは別個の太陽系の靈魂が移住してきて、地球で生活するという大問題に取り組みはじめた。（最初に）言葉によって肉体が創られ、（やがて）現在の形の人間があらわれたのは……その瞬間だった！」しかし、人間は「聖書説」とは違って、最初の「土」からの創造だったではありません。「地球独特の生物の進化が進んでいるころ、“神の子”と呼ばれる靈魂の大群が地球に移住してきてある形の肉体に宿ったものが人類なのだ。」では、その「ある形の肉体」とは、何であったのでしょうか。「類人猿の一種が大気圏外から移住してきた靈魂に利用されて人間の原型となったことは間違いない。」それは、キリスト教の「完全創造説」とは異なっていますが、もう一方の「進化論」とも異なっていて、いわゆる「ミッシング・リング」は存在しないことになります。「それは、この“鎖の環”が霊的なものであって、有機的なものではないからである。」実際は、神話が示すように、類人猿以外にも様々な形の生き物が試みられたのではないのでしょうか。

結局のところ、「宇宙人」とは、一般に考えられているような他の星の「知的生命体」というよりも、むしろ別の次元の「存在」、つまり「神々」のことなのです。ただし、「神々」にも色々あることは知っておくべきでしょう。そこで誰しもが思い当るのが、地球上に数多く残されている「神話」ですが、それらはかなり変形されているとはいえ、元々は実話だったのです。そして、そのことも、聖書に記されていたのでした。《Les Néphilim se trouvaient sur la terre en ces jours-là, et aussi après cela, quand les fils du vrai Dieu continuèrent d'avoir des rapports avec les filles des hommes et qu'elles leur donnèrent des fils: ils furent les hommes forts du temps jadis, les hommes de renom》:『ネフィリム』は、その頃も以後も地上にありけり。そは、まことの『神』の子らが人の娘たちと関係を持ち続けて、彼女らが彼らに息子をもたらしたる頃なり。彼ら息子（「ネフィリム」）は、昔日

6 ワンダラー

先の『天体』と『天使』のよぎりし沈黙の世界」について、かつて、「これは無限の宇宙空間と永遠の時の流れの中で起きた『大宇宙の荘厳な神秘劇』であって、そこに様々な天体が現われては消えて行ったこと、またその天体の生命を救う使命を帯びた者たちがいて、やはり現われては消えて行ったことを、わずか一行（十二音綴）で表現したものなのである」（「ランボオと聖書」と、簡単なコメントを添えました。しかし、もはや、すべてが明らかにされる時が来ました。ここからは、殆ど説明不能なことについて、様々な文献の助けを借りながら、最後のメッセージを伝えねばなりません。

先ず最初に、一冊の書物を紹介しましょう。ウィリアムソン博士の「神々のルーツ」（増野一郎訳）です。一般には余り知られていませんが、知る人ぞ知る「伝説の書」で、「宇宙考古学のバイブル」とまで言われた本です。しかしながら、これを理解するには、最初に「難関」がある為に、いきなり問題の核心に入らなければなりません。それは何かと言えば、いわゆる「地球外生命体」の存在についてです。これに関しては多くの人が、いまだに良くて半信半疑であり、大抵はSFの世界のことと考えています。と言うか、これまではそうでした。しかし、目下すべてが急速に変わりつつあります。例えばアメリカ人の多くが、今では“unidentified flying object”（UFO）の存在を信じていると言われますが、それは、あの「百匹目のサル現象」（出所はワトソンの「生命潮流」）が始まったということなのです。実は昔の聖書の中でも、このUFOは「戦車」（ヘブライ語の「メルカバ」）という名前で、既に登場していたことを御存知でしょうか。一例を挙げましょう。《Les chars de guerre de Dieu sont par dizaine de milliers, des milliers encore et toujours》：「『神』の戦車は、およそ一万と更に数千の数で、常に存するなり」（「詩篇」六十八章十七節）。この「戦車」は、古代の戦闘用二輪車のことですが、「神」が地上を走る「戦車」に乗る訳がありません。中でも圧巻は、「エゼキエル書」の冒頭で、預言者のエゼキエルが「神」に遭遇する場面です。何とも言えない、奇怪な「神」の描写が克明になされますが、長い間誰も理解できなかったに違いありません。何故ならば、それが実は「円盤」であることが分った時に、初めて納得が行くものとなるからです。それを綿密に分析して解明したのが、ウィリアムソンの同書の「第三章・預言者」であり、その為にこの事実はかなり知られるようになりました。実を言えば、現代の大国の支配者たちは、「彼等」が何者かをよく知っているのです。何故ならば、「彼等」が最初に接触した当事者だからです。しかし、恐れた地球の支配者たちは、「黒船」に対して「鎖国」

こは「神」が支配する所ですが、実際はイエスが代理として直接支配する場所のことです。そこで、天使ガブリエルがマリアの前に現われた時もイエスについて、こう言ったのです。《Celui-ci sera grand, et on l'appellera Fils du Très-Haut, et Jéhovah Dieu lui donnera le trône de David, son père, et il régnera sur la maison de Jacob à jamais, et son royaume n'aura pas de fin》:「この者は偉大なる人物になり、『至高者（「神」）の子』と呼ばれん。而して、『エホバ神』は、彼に父ダビデの王座を与えん。而して、彼はヤコブの家（一族）を永久に支配し、彼の王国に終りはなからん』（「ルカ伝」一章三十二節と三十三節）。かねて、「メシア」は「ダビデ王」の家系から出ると予告され、イエスはその家系でした。それ故、「マタイ伝」はイエスの系図を長々と記すことから始まるのです。また、「ヤコブ」は言うまでもなくイスラエル民族の始祖で、その十二人の子供が世界の民族の始祖ですから、「ヤコブの家（一族）」とは、世界のすべての民族の家、即ち「地球」を指します。ですから、「彼の王国」とは、「地球再創造」によって生まれた「新地球」に外なりません。それは昔から久しく約束されたことで、地球は人々が永遠の命を享受する地の楽園となるでしょう。それこそが、イエスが「愛」によって統治する「王国」なのです。そこでイエスは、あの有名な「山上の垂訓」の中で、《Vous devez donc prier ainsi: “Notre Père qui es dans les cieux, que ton nom soit sanctifié! Que ton royaume vienne!”》:「それ故、汝等かく祈るべし、『天にまします我らの父よ、御名の崇められんことを。御国の来んことを』（「マタイ伝」六章九節と十節）と、人々に祈り方を教え、「王国」の到来を願うようにと言ったのです。そして、後に弟子たちが何時そのような事が起こるのかと尋ねたのに答えてから、更にこう予告したのでした。《cette bonne nouvelle du royaume sera prêchée par toute la terre habitée, en témoignage pour toutes les nations; et alors viendra la fin》:「この喜ばしき、王国の知らせは、あらゆる民族への証言として、人の住む全地に宣べ伝へられん。而して、その時に終りは来ん」（同、二十四章十四節）。かくして、キリスト教は、地球上に限なく広まりました。実際は、「意味」がよく分からずに、かなり疑問のあるやり方で行われましたが。なお、日本の「ひふみ神示」は、同じことを「神の世」になると表現していますが、それは「民」が「神」になるからです。

以上が、「地球救出劇」の、いわば「表舞台」です。では、それを実地に行う「舞台裏」は、どうなっているのでしょうか。

を代表して、「神」に取りなしを行う者、それが「大祭司」です。そして、彼が「大祭司」として「神」に捧げた「犠牲」(いけにえ)とは、自分自身の「命」そのものに外なりません。これについては、「テモテへの第一書簡」で、《qui s'est donné lui-même en rançon correspondante pour tous》:「彼(キリスト・イエス)、皆の為に相応の身代金として己れ自身を差し出だせり」(二章六節)と、明記されています。要するに、イエスは死すべき人間の命を自分の不滅の命で贖なうことによって、人間に永遠の命をもたらす為にやって来た、ということなのです。それを前もって予告したのが旧約聖書の「ダニエル書」であって、「メシア」(キリスト、即ち救世主)が定められた時にやって来るのは、《pour mettre un terme à la transgression, et pour faire propitiation pour la faute, et pour introduire la justice pour des temps indéfinis》:「(人の)違犯を終ふ為なり、また(人の)罪を贖なふ為なり、また無限の時にわたりて正義をもたらす為なり」(九章二十四節)と、預言者ダニエルに「天使ガブリエル」が告げたのでした。

以上が、聖書のメイン・テーマである「地球再創造」の核心をなす「イエス降臨」の意味ですが、そもそもは、「神」の「言葉」から始まりました。《Voici que je crée de nouveaux cieux et une nouvelle terre》:「我(神)いま新しき天と、新しき地を創造せんとす」(「イザヤ書」四十五章十八節)。それが単なる精神的な変化ではなく、文字通りの物理的な変化であることは、例えば十二使徒の頭のペテロが、かつての「大洪水」に言及した後、今度は「火」によって「天」も「地」も大変化を受けると、かなり具体的に述べていることから明らかでしょう(「ペテロの第二書簡」三章七節と十節)。それ故イエスも、《Lors de la recreation, quand le Fils de l'homme s'assoira sur son trône glorieux》:「再創造に当りて、『人の子』(イエス)が己が栄光の王座に坐すとき」(「マタイ伝」十九章二十八節)と言ったのですが、具体的には、この「王座」はどういう意味なのでしょう。それを知る為には、再び先の「ダニエル書」を見なければなりません。《“Et dans les jours de ces rois-là, le Dieu du ciel établira un royaume qui ne sera jamais supprimé》:「而して、これら王たち(世界の支配者たち)の日に、『天の神』は王国を建てるべし、そは絶えて滅びることなからん」(二章四十四節)。従って、イエスは、この「王国」の王座に坐す「王」(支配者)ということになります。この「王国」(royaume)は、「『神』の王国」(le royaume de Dieu)とか「天の王国」(le royaume des cieux)とも言うために、「あの世」とか「天国」を指すものと思われて来ました。しかし、そうではないことは、以上のことから明らかではないでしょうか。「『神』の王国」も「天の王国」も、そ

milliers le servaient et dix mille fois dix mille se tenaient juste devant lui》：「千の千倍ほどが彼（「神」）の周囲に侍り、而して一万の一万倍が彼の正面に立ちたりき」（「ダニエル書」七章十節）。そして、彼らは「奉仕」が仕事ですから、《à ses anges il donnera un ordre à ton sujet, / Pour te garder dans toutes tes voies》：「彼（「神」）、汝の為に己が天使らに命令を出ださん、汝の総ての道で汝を守るため」（「詩篇」九十一章十一節）。それ故、彼ら「天使」は「守護天使」とも言われるのです。

では、彼ら「天使」は何故「人間」を守るのか。この両者は、どのような関係にあるのでしょうか。《Tu l'as abaissé quelque peu au-dessous des anges》：「御身（神）は其（人）を天使らより少し低めたり」（「ヘブライ人への書簡」二章七節）。これが、「人間」が「天使」に保護される理由です。イエスはそのような「人間」を、「幼子たち」と呼びました。《moi et les petits enfants que Jéhovah m'a donnés》：「我と、エホバの我に与えし幼子たち」（同、二章十三節）。そして、彼が自分自身も同じ「人間」になったことを、パウロはこう語ります。《Ainsi donc, puisque les “petits enfants” ont part au sang et à la chair, lui aussi, pareillement, a participé aux mêmes choses》：「かくして、『幼子たち』が血と肉を持つが故に、彼（イエス）もまた等しく同じ物を持てり」（同、二章十四節）。イエスは、何故そこまでするのか。それを、彼パウロはすぐ続けて、こう説明します。《afin de réduire à néant, par sa mort, celui qui a le moyen de causer la mort, c'est-à-dire le Diable, et d'affranchir tous ceux qui, par crainte de la mort, étaient tenus en esclavage pendant toute leur vie》：「（そは）死を起す手立てのある者、即ち「悪魔」を、己が死を以て滅ぼす為なり。而して、死を恐れて生涯（死の）奴隷でいたる者を解き放つ為なり。」この「己が死を以て、死を起す手立てのある者を滅ぼす」は、いかにもパウロらしい彼独特の言い回しですが、それにしても、何故イエスの死はそれを可能にするのでしょうか。《En conséquence, il a dû devenir en tous points semblable à ses “frères”, afin de devenir un grand prêtre miséricordieux et fidèle dans les choses qui concernent Dieu, pour offrir un sacrifice propitiatoire pour les péchés du peuple》：「よって彼、完全に己が『兄弟』と等しかるべかりけり。そは慈悲深く、神事を遵守する大祭司（祭司長）になる為なり。かくして民の罪を贖なふ犠牲を捧ぐる為なり」（同、二章十七節）。イエスは、すぐ前の十一節で、人間を「兄弟」とも呼びました。《il n'a pas honte les appeler “frères”》：「彼、彼ら（人間）を『兄弟』と呼ぶを恥じず。」それは勿論、同じ「親」から生まれた「子」だからです。この「兄弟」である「民」

かにされることですが、結論から言えば、この最初の小文字の「神」こそ、あの「イエス・キリスト」に外なりません。それ故、使徒パウロは「コロサイ人」に、《Il est l'image du Dieu invisible, le premier-né de toute création》：「彼（イエス）は、見えざる『神』の像なりて、全創造物の初子なり」（「コロサイ人への書簡」一章十五節）と語ったのでした。また、先の「コリント人への第一書簡」でも、すぐ続けて、《et il n'y a qu'un seul Seigneur, Jésus Christ, par l'entremise de qui sont toutes choses, et nous par son entremise》：「而して、唯ひとりの主イエス・キリストありて、この方を通して物すべてが有り、我らもこの方を通して有るなり」と、パウロの教えも、「ヨハネ伝」と完全に一致しているのです。ここで先ほどの「創世記」の「天地創造」を、もう一度思い出して下さい。「その時『神』言へり、『光あれ』と」の少し後に、こんな箇所があるのです。《Puis Dieu dit : "Faisons l'homme à notre image, selon notre ressemblance, et qu'ils tiennent dans la soumission les poissons de la mer, et les créatures volantes des cieux, et les animaux domestiques, et toute la terre, et tout animal se mouvant qui se meut sur la terre"》：「次いで『神』言へり、『人を我らの類似に従ひて、我らに似せて造らん。而して人は皆、海の魚も、空飛ぶ生き物も、家畜も、全地も、地上に生く全動物も従えよ』」（一章二十六節）。「聖書」を初めて読んだ人は、この突然現われた「我ら」に驚いたに違いありません。しかも、この「我ら」が「神」と誰なのかは、以下においても全く説明がありません。しかし、今や私たちは、その意味を理解したのです。つまり、「我ら」が「親子」であることを。

「イエス」は「初子」でしたが、その他の「子」も、同じ「霊的存在」であることに変わりありません。《Ne sont-ils pas tous des esprits pour le service public, envoyés pour servir ceux qui vont hériter du salut?》：「彼ら（天使）は皆、公の奉仕の為の霊にあらざるや。正に救済を受け継がんとする者に仕へる為に、（「神」より）送られたる者にあらざるや」（「ヘブライ人への書簡」一章十四節）。彼ら「天使」は、なぜ「霊」なのか。それは、《Dieu est Esprit》：「『神』は『霊』なり」（「ヨハネ伝」四章二十四節）だからです。従って、彼らは「サタン」（「反抗者」の意）も含めて、「まことの『神』の子」と言われます。《le jour vint où les fils du vrai Dieu entrèrent pour se placer devant Jéhovah, et même Satan entra au beau milieu d'eux》：「まことの『神』の子らが『エホバ』の前に立つ為（そこに）入る日来たりて、『サタン』まで彼らの真中に入りたり」（「ヨブ記」一章六節）。では、彼ら「天使」の数は、どの位なのでしょう。《Mille

彼の熟慮せし後、エホバの使者は夢に現われ、かく語りぬ。『ダビデの子ヨセフ、汝の妻マリアを家に迎へるを恐るる勿れ。その身に起こりしことは、聖霊によればなり。其は息子を生みて、汝は子をイエスの名をもて呼ぶべし。何となれば、彼は民を罪より救ひ出ださんが為なり』(「マタイ伝」一章十八節から二十一節。絵画で有名なマリアへの「告知」は、「ルカ伝」にある)。かつて、それ故に信じられないと言われた「処女懐妊」ですが、まことに長い間人々の「蹟きの石」でした。ところが、今や時代は人工授精どころか、クローンまで可能にしてしまって、もはや信仰の問題ではなくなったのです。なお、最後の一文は、イエスの名前がヘブライ語の「イェーホーシュア」(エホバは救い)に由来するもので、彼が文字通り「神」の名で民を救うことを意味しています。

では、「神」と「使者」と「人間」は如何なる関係にあるのか。また、イエスとは何者か。そのような根本原理を明らかにしたのが、あの「言霊」の「ヨハネ伝」なのです。《Au commencement était la Parole, et la Parole était avec Dieu, et la Parole était dieu. Celui-ci était au commencement avec Dieu. Toutes choses vinrent à l'existence par son entremise et, en dehors de lui, pas même une seule chose ne vint à l'existence》:「初めに『言葉』ありて、『言葉』は『大神』と共にありて、『言葉』は神なりき。神は初めに『大神』と共にありき。物すべて神を介して存在に至り、それを介さずには物ひとつさえ存在に至らざりき」(一章一節から三節)。よく知られていることですが、大文字の《Dieu》(区別のため、ここだけ「大神」と訳す)は「一神教」(monothéisme)の「神」であり、小文字の《dieu》は「多神教」(polythéisme)の「神」であることを、先ず頭に入れておきましょう。そして、大文字の「神」については、《Cependant pour nous il n'y a qu'un seul Dieu, le Père, de qui sont toutes choses, et nous pour lui》:「さりながら、我らには、『父』なる唯一の『神』の外はなく、すべての物はそこから出でて、我らは御為にあるなり」(「コリント人への第一書簡」の八章六節)とあり、《le vrai Dieu》:「まことの『神』」とも言われています(「申命記」、四章三十五節など)。中でも「黙示録」の、《Je suis l'Alpha et l'Oméga, Celui qui est, et qui était, et qui vient, le Tout-Puissant》:「我は『アルファ』(最初)にして『オメガ』(最後)なり。『いま有り、かつて有りて、これから生ずる者』、即ち『全能者』なり」(一章八節)は、特に人口に膾炙していますが、要するに、それはすべての究極の原因なのです。その「絶対意識」が、無限の時の中で「自分」を知ろうと思い続けて、その「思い」は個有の振動の響き、つまり「言葉」となりました。やがて「言葉」は形を取って、自分の分身である小文字の「神」となったのです。そして、以下の節で徐々に明ら

ん。何故ならば、すぐに続けて、こう言っているからです。《*mais il faut que je sache, s'il doit remonter à un ciel, que je voie un peu l'assomption de mon petit ami*》:「でも私の知る限り、彼が天に昇らなければならないとすれば、ここはひとつ私の大事な人の被昇天を見なければなりません。」《*assomption*》は「被昇天」と訳されていますが、伝説の「マリア昇天」のこと（天使に助けられて、肉体のまま天に昇ったと言う）。そして、「彼」の「昇天」を「彼女」が見送るのは、「復活」後のイエスが弟子たちの見守る中で「昇天」(*ascension*) したのと同じ図式になります。「ハムレット」も、人類救済の使命を帯びた「天使」ですから、イエスと同じく、「天使」に助けられて「天」に帰ったのです。しかしながら、「天」からやって来て再び帰る「天使」とは、畢竟何者なのか。再度、それを問わねばなりません。

5 天使（その二）

この「天使」なるものを知るためには、どこに手掛かりを求めればよいのでしょうか。人間の歴史で、数多くの「天使」が登場するのは「聖書」の世界であって、その他には余り見当たりません。近年世界的な「天使ブーム」で、様々な「天使論」が著わされていますが、その源の多くは「聖書」か、後世のクリスチャンの著作と思われます。そこで、この「聖書」に基づいて、具体例を見ながら検討して行きましょう。先ず、《*ange*》（英語では *angel*）は、本来のギリシャ語の「アングロス」と同様に、原語のヘブライ語の「マルアーク」でも、単に「使者」を意味したと言われます。では、どのようなことを伝える「使者」なのか。様々な例がありますが、一番よく知られているのが、イエスの誕生を知らせる「受胎告知」でしょう。《*Alors que sa mère Marie avait été promise en mariage à Joseph, elle se trouva enceinte par le fait de l'esprit saint, avant qu'ils fussent unis. Mais Joseph, son époux, qui était juste et ne voulait pas la donner en spectacle publiquement, se proposa de divorcer avec elle en secret. Or, après qu'il eut réfléchi à ces choses, voilà que l'ange de Jéhovah lui apparut en rêve et lui dit: "Joseph, fils de David, n'aie pas peur de prendre chez toi Marie, ta femme, car ce qui a été engendré en elle vient de l'esprit saint. Elle enfantera un fils et tu devras l'appeler du nom de Jésus, car il sauvera son peuple de ses péchés"*》:「母マリアはヨセフと婚姻を約せしが、婚姻の前に聖霊によりて身籠りぬ。しかれども、夫のヨセフは心正しく、かつ其を晒者にせんとは思はざれば、密かに離縁すべしと計りき。是をば

それは長い自己探求の道で求めつづけて、遂に出会った「本当の自己」そのものに外なりません。そして、この《Génie》はラテン語の《genius》が語源であり、それは《divinité tutélaire》:「後見の神」、即ち《ange tutélaire》:「守護天使」のことなのです。そうすると、これまで「オフェリア」の手を引いて導いてきた「ハムレット」も、実は「オフェリア」の「守護天使」だったことが分かるでしょう。先の《voyant》(予見者)には、盲人と結婚した「目明き」の意味があることを付け加えておきます。

ここで、少し補足しておきましょう。近年、日本の「神道」は世界的な脚光を浴びていますが、日本でも最近特に注目されているものに「ひふみ神示」(「日月神示」とも言う)があります。そして、その中に「守護神」の説明がありますので、それを見てみましょう。「霊的自分を正守護神と申し、神的自分を本守護神と申すぞ。幽界的自分が副守護神ぢゃ。本守護神は大神の歓喜であるぞ」(第三十巻 冬の巻)。「霊的自分」は、「霊界」に同時に存在しています。そして、「神的自分」は一番奥の「本体」であって、「神」と直結しています。なお、「幽界」は道に外れた想念によって作り出された世界で、いわゆる「地獄」のこと。従って、正しくない行為もまた、守護されるのです。それ故、「末世」とは、「副守護神」の活躍する世と言えるでしょう。ではランボオの場合、どれに当るのか。「オフェリア」の「守護神」(ハムレット)は「正守護神」であって、「二人」が遂に出会った「守護神」が「本守護神」でしょう。要するに、人間は「多次元的存在」の一部なのです。これが最終的な結論であって、ここでも先に出しておきますが、「外」の世界しか信じないうちは気がつきにくく、また「神」が自分の「外」に存在すると思えば、宗教に頼るかも知れません。

それにしても、「お伽噺」の最後の結末は、どういうことなのでしょう。先ほど見たように、「錯乱 その一」は、「彼女」が「彼」のことを語ったものでした。その中で、この「二人」の「別離」について、何か言及していないのでしょうか。すると、やはり予想通りで、「彼女」が語る「彼」の言葉は、《Comme ça te paraîtra drôle, quand je n'y serai plus, ce par quoi tu as passé》:「私がここから姿を消したとき、過ぎ去ったことは、何とも奇妙に見えるだろう」とか、《parce qu'il faudra que je m'en aille, très loin, un jour》:「何故ならば、いつの日か、はるか彼方へ行かねばならないと思うから」などと、その「別離」を予告していたのでした。そして、「彼女」も最後には、《Un jour peut-être il disparaîtra merveilleusement》:「恐らく或る日、彼は奇跡のように姿を消すことでしょう」と、彼が突然いなくなることを覚悟したのです。それは、どこか地上の遠くへ行くということではありませ

ペルシャの知られざる「守護神」は

この《vingt ans》（二十歳）は「青春」を表わすもので、先の「七歳の詩人」と同様に、文字通り「二十歳」と言っているのではありません（「イリュミナシヨン」の「青春」*Jeunesse*の《III》の題も、同じ意味の *Vingt ans* である）。また、この《inconnu》（未知の）は形容詞ですが、彼が追い求めている「未知なるもの」（『予見者』の手紙）の《l'inconnu》）を意味しているに違いありません。そして、「イリュミナシヨン」の最後の作品が正しく、遂に捉えた「守護神」*Génie* そのものなのです。ところが、「イリュミナシヨン」にはもう一つ、この「守護神」との出会いを過去の「物語」として語ったものがありました。それが第三作の「御伽噺（おとぎばなし）」*Conte* です（「イリュミナシヨン」は原稿が人手に渡ったため、順不同と言われる）。

Un soir il galopait fièrement. Un Génie apparut, d'une beauté ineffable, inavouable même. De sa phisionomie et de son maintien ressortait la promesse d'un amour multiple et complexe ! d'un bonheur indicible, insupportable même ! Le Prince et le Génie s'anéantirent probablement dans la santé essentielle. Comment n'auraient-ils pas pu en mourir ? Ensemble donc ils moururent.

Mais ce Prince décéda, dans son palais, à un âge ordinaire. Le Prince était le Génie. Le Génie était le Prince.

彼（親王）、或る夜倨傲なる様にて早駆けしたり。時に一人の「守護神」の現れけるが、得も言へぬ美しさなりき。顔と物腰より多様にして複雑なる愛の契りぞ出でたりき。そは言語に絶したる堪へ難きまでの幸ひの契りなりけり。「親王」と「守護神」は、けだし本質的健全さの中で消滅しけん。二人はいかでか、その為に死せざりけん。故に、共に死にけり。

しかれども、「親王」は己が宮殿にて尋常の齢に身罷りぬ。「親王」は「守護神」なりき。「守護神」は「親王」なりき。

もう一つの *Génie*（守護神）では、《nous》（我々）が何度も主語や目的語や強勢形として使われて、形容詞の《notre, nos》までありますが、これらが一つも使われていなくても、この「親王」が「二人」であることは明白です。しかしながら、この「守護神」との出会いは、何を表わすのでしょうか。しかも、「一人」が「守護神」と同じであったとは一見意外な感じを与えますが、

宇宙の「ワンダラー」

— Mais l'ange des berceaux vient essuyer leurs yeux,
Et dans ce lourd sommeil met un rêve joyeux,

— されど揺籃の天使来たりて彼らの眼を拭ひ
その重き眠りに楽しき夢をもたらすなり。

そして、彼ら孤児の見た「夢」が、またも、あの愛と喜びに満ちた「大自然」
なのです。

Par la fenêtre on voit là-bas un beau ciel bleu;
La nature s'éveille et de rayons s'enivre...
La terre, demie-nue, heureuse de revivre,
A des frissons de joie aux baisers du soleil...

窓より彼方にすばらしき青空見ゆ。
天然は目覚め光に酔ひて…
嬉しげに蘇る半裸の大地が
太陽の口付けに身を震はして喜び…

ところで、彼は《ange》（天使）の他に、同じような意味で、《Génie》：「守護神」という表現も用いています。同じラテン語詩の中に「ユグルタ」*Jugurta*という大作がありますが、その最後で、《c'est le Génie des rivages arabes qui t'apparaît》：「汝（ユグルタの孫）の前に現れたるはアラブの国の『守護神』なり」と語ったのは、祖先の「霊」（ヌミディア王のユグルタ）でした。そして、「初期詩篇」の「慈悲の姉妹」*Les Sœurs de charité*では、同じ《Génie》の表現が、自分自身の「守護神」として用いられています。

Le jeune homme dont l'œil est brillant, la peau brune,
Le beau corps de vingt ans qui devrait aller nu,
Et qu'eut, le front cerclé de cuivre, sous la lune
Adoré, dans la Perse, un Génie inconnu,

眼は輝き肌は褐色の青年
裸で歩まん二十歳の美しき体ぞ
月下に額に銅の輪つけて彼を崇めたらんか

父母のように「男性」と「女性」が分離していないということで、彼はこのようにして、地球でばらばらになっていた宇宙の「男性原理」と「女性原理」を一つに統合しました。それは、先ず自分の中で「両性具有」を実現し、それによって外の「世界」を統合する創造の試みだったのです。

そのような訳で、ランボオの本当の「母」と「父」は「海」（星）と「太陽」ですが、今度は、直接の父の系譜を見て行きましょう。彼が「『パン』の子」と自称していることは既に見た通りですが、正確に言えば、《fils de Pan》は、「『パン』の子孫」です。ある意味では、それは当然のことと言えるでしょう。何しろ、「パン」は「大いなるすべて」なのですから。そこで、「ヘルマフロディトス」であるランボオの直接の父は誰かとなると、系譜上は必然的に「ヘルメス」ということになるでしょう。この「神」は神々の「使者」（神々が人間に送った使者）として知られていますが、占術にも通じているとされ、「ヘルメスの術」は「錬金術」を指します。そこで思い出されるのが、「地獄時代」のいよいよ最後の「決別」*Adieu*で、自らを振り返って、《moi qui me suis dit mage ou ange》：「我はマギ、はたまた天使（神の使い）と称せり」と言っていることです。《mage》（マギ）は「魔術師、占星術師」ですから、彼が「錯乱 その二」で語ったように、「言葉の錬金術」を行ったことを指すのは見やすいでしょう。また、《ange》（天使）についても、「詩人」は「神」からインスピレーションを受けて、それを人間に伝える「メッセンジャー」ですから、正しく「ヘルメス」の子に相違ありません。しかしながら、「天使」とは、そもそも何者なのでしょう。

4 天使（その一）

よく知られているように、本来のギリシャ語の《angelos》（アングロス）は、「メッセンジャー」、つまり《Personne chargé de transmettre une nouvelle》（*Petit Robert*）：「知らせを伝える役の者」（仏々辞典）でしたが、やがて《Etre spirituel, intermédiaire entre Dieu et l'homme》（*ibid.*）：「『神』と人間の間を取り次ぐ霊的存在」（同）の意味で用いられるようになりました。そこで、改めてランボオの作品を見てみると、これは何と最初から用いられた重要な言葉であることが分かります。つまり、最初の作品群のラテン語詩の中に、正しく「天使と子供」*L'Ange et l'Enfant*があったのです。そして更に、最初のフランス語詩の「孤児の御年玉」でも、先ほどの見捨てられた「孤児たち」を慰めに來たのが、この「天使」なのでした。

力」の化身と言えるでしょう。それ故、「ヴィーナスを祈る」は、「御身ヴィーナスは天の星々の下すべての所に物住まはせ給ふ」なのでした。

以上のような「ヴィーナス」が、彼の本当の「母」なのです。しかしながら、「星」が何故「人間」の親なのか。それは、人間の「体」と「天体」が同じ《corps》（物体）だからです。では、同様にして、本当の「父」はいるのでしょうか。勿論います。「ヴィーナス」の「母」のような究極の意味の「父」は、「太陽と肉体」の題名がそのまま示しているように、正に「太陽」そのものなのです（「肉体」は「ヴィーナス」である）。その後「夜」へ深く入って行って、やがて行き詰まった彼は、辛うじてふたたび「太陽」の下まで戻ってきました。その時書かれたのが、最後の絶唱の一つ、「永遠」*L'Eternité* です。

Elle est retrouvée.
Quoi ? — L' Eternité.
C' est la mer allée
Avec le soleil.

見出でたるかな。
何をぞ。「永遠」なり。
そは共に行きたる
海と太陽。

先ず、最初の「プロローグ」で、彼が如何に「日没」を名残り惜んでいたかを思い出して下さい。その「日没」と共に姿を隠した「海」（母）を求めて「夜」へ入って行った彼は、その姿を夜空の星に見ました。要するに、「空」は「海」なのです（昼はどちらも青い）。そして、その「母」と一体になるために、自分も「夜」に輝く「星の光」となったのです。それが「イリュミナシヨン」に外なりません（英語のイリュミネーションと同じ）。しかし、「詩人」という聖職についた彼は、働くことを潔しとせず、殆ど食べませんでした。やがて「飢餓祝祭」*Fête de la faim*を行った彼は、心身ともに限界に達しましたが、長かった「夜」の後によりやく「朝」を迎えて、ふたたび同じ「海」と「太陽」を見い出したのです。念のために、「地獄時代」の中に、「地獄の夜」*Nuit de l'enfer*と、「朝」*Matin*という章があることを付け加えておきましょう。なお、同書の「錯乱 その二 言葉の錬金術」*Délires II Alchimie du verbe*にもこの詩が挿入されていますが、そこでは後半が、《C' est la mer mêlée / Avec le soleil》：「そは太陽と一緒にたりたる海」となっています。それは、人間の

ばなりません、この「測り難き虚空」、つまり「無限の空間」に対する「恐れ」(l'horreur de l'espace)が、実は「オフェリア」の気が狂った理由なのです。「彼女」が見た「夢」は、「天、愛、自由」ではなかったのでしょうか。また「彼」は、「汝の青き眼は恐ろしき『無限』に怯えぬ」と言わなかったのでしょうか。「青」とは「恐怖」を表わす色で、「天」の「無限」の「青」を見て、その「眼」も「青く」なったのです。それ故、「汝大いなる幻を見て言葉出でざりき」なのでした。そのような「オフェリア体験」があったからこそ、一年後に大いなる覚醒によって「別人」に生まれ変わった彼は、その「無限」を見すえる真の「詩人」たらんとして、《Le Poète se fait voyant par un long, immense et raisonné dérèglement de tous les sens》:「『詩人』は、全感覚の長期のわたる、大々的な、計算された乱脈によって予見者になるのです」と、一見途方もないことを言い出したのです。そして、このような「予見者」になるための超人的な努力によって、《Il arrive à l'inconnu, et quand, afforé, il finirait par perdre l'intelligence de ses visions, il les a vues》:「彼(詩人)は未知なるものに到達しますが、その時発狂して、自分の見るものが理解できなくなっても、それを見たのです」と、不退転の決意を表明したのでした。そこで、最初は詩人として「闇」から「光あふれる大自然」へ向った彼でしたが、今度は逆に「闇」に向って、「夜」の世界へと入って行ったのです。そして、そこに見た「宇宙を支配するもの」の姿が、「星がバラ色に涙して」*L'Etoile a pleuré rose*に外なりません。

L'Etoile a pleuré rose au cœur de tes oreilles,
L'infini roulé blanc de ta nuque à tes reins;
La mer a perlé rousse à tes mammes vermeilles
Et l'Homme saigné noir à ton flanc souverain.

御耳の真中に「星」はバラ色に涙し、
御項より御腰へ無限は白く走れり。
鮮紅色の御乳房に海は褐色に玉なし、
至高の御脾腹に「人」が黒く出血せり。

この詩は一詩節(四行)のみの特異な形式で、内容も極めて難解です。しかしながら、この作品は既に完全に解明したもののなので(L'Interprétation IV、同53号)、詳細な説明は省きますが、要するに「無限」の「夜空」に、「星」が型取る巨大なヴィーナス像を見たのでして、それは正しく「全宇宙を支配する

う。ところが、彼はその挙句に、《O que ma quille éclate ! O que j'aille à la mer》：「嗚呼わが龍骨は砕けよ、われ海へ行かまほし」と、突然まったく不可解なことを言ったのです。「海」の只中であって「海」へ行きたいとは、一体何を考えているのでしょうか。しかしながら、この《la mer》を《la mère》に置き換えれば、「われ母の所へ行きたし」となり、彼はもはや、船体を海へ捨てて（つまり海の中へ行くことによって）、本源の「母」の元へ帰りたいと願っていることが分かるでしょう。彼の言う「母」は、「海」より更に奥深い存在であると考えねばなりません。それを最初に垣間見せているのが、先の「太陽と肉体」なのです。

— Pourquoi l'azur muet et l'espace insondable ?
Pourquoi les astres d'or fourmillant comme un sable ?
Si l'on montait toujours, que verrait-on là-haut ?
Un Pasteur mène-t-il cet immense troupeau
De mondes cheminant dans l'horreur de l'espace ?
Et tous ces mondes-là, que l'éther vaste embrasse,
Vibrent-ils aux accents d'une éternelle voix ?

何ぞ蒼天は黙して虚空は測り難き。
何ぞ金色の星辰は砂粒のごと天に満つ。
絶えず登り行かば彼方の高みに何をか見ん。
恐ろしき虚空を歩む天体の広大なる群、
そを一人の「羊飼い」が導くや。
広漠たる天空の抱くこれらの天体は
すべて一つの久遠の歌声に打ち震ふや。

先ず、ここの「天体」は、冒頭に挙げた《Silences traversés des Mondes et des Anges》（「天体」と「天使」のよぎりし沈黙の世界）と同じ《mondes》であることを指摘しておきます。また《Pasteur》（羊飼い）に関しては、《le Bon Pasteur》（善き羊飼い）や《le Pasteur des âmes》（靈魂達の羊飼い）がイエス・キリストを指すことはよく知られていますが、「パン」が「羊飼いの神」であったことも思い出して下さい。そして、この最後の二行が先ほどの引用部分ですが、まことに「言霊」を発する「神」（大いなるすべて）こそは、最高にして最大の「詩人」（創造者）と言えるのではないのでしょうか。しかしながら、以上が「ヴィーナス」と、どう関わるのか。順を追って説明しなければ

海のアフロディテよ。ああ前途は険し
 他の「神」が我らを十字架に繋ぎてより。
 ヴィーナスは「肉体」、「大理石」、「花」ぞ、御身こそ我信ず。

その元の題はラテン語で、*Credo in unam* : 「我、一なるものを信ず」でした。彼がここで、偽の「母」のキリスト教との違いを強調しているのは言うまでもありません。「七歳の詩人」の、《*Tout le jour il suait d'obéissance*》: 「彼、一日中服従の汗をかきけり」のように、自分に《*acres hypocrisies*》: 「苦々しき偽善」を強いる人間の母ではなく、「愛」と「美」の女神「ヴィーナス」こと「アフロディテ」を崇めて、この《*la mer*》(ラ・メール)、即ち「海」から生まれ出たものを、本当の《*la mère*》(ラ・メール)、即ち「母」と考えたのです。以前にも指摘しましたが、ランボオにあっては、《*la mer*》と《*la mère*》が同義であることを知らねばなりません。詩においては、同じ「音韻」は意味が重なるのです。例えば、「初期詩篇」の第一作「孤児のお年玉」*Les Etrennes des orphelins* では、「暗く寒き部屋」に寝る「子どもたち」を描写してから、《*votre cœur l'a compris : ces enfants sont sans mère*》: 「人々は知りぬ、こは母なき子なり」と言っています。それは、一義的に見れば、何の変哲もない表現かも知れません。しかし、この「暗く寒き部屋」(正確に言えば、《*La chambre est pleine d'ombre*》: 「部屋は暗闇に満つ」、《*Les petits sont tout seuls en la maison glacée*》: 「幼子らは凍てたる家に二人きりなり」)が《*sans mère*》(母なし)を表わしているのは、同時にそこに《*la mer*》(海)である「ヴィーナス」がいないということなのです。それは、「海」が表す大自然の「愛」、即ち「明るさ」や「温かさ」や「緑の色」や「波の音」などから切り離された状態に外なりません。このような見方は、いささか考えすぎでしょうか。そうとは言えません。余人はいざ知らず、この詩人の場合は、深読みの上にも深読みをしなければ全体が見えてこないのです。そこから、さらに突拍子もないことを言うようですが、この「孤児」とは、ヨーロッパのクリスチャンの子供の姿であることに気がつくことでしょう。「キリスト教」の母体である「ユダヤ教」は、父系社会の宗教なのです。ランボオ自身は、父親の不在のために「母」が「父」になってしまい、《*sans mère*》(母なし)の状態を人一倍痛感したに違いありません。彼の「慈悲」の第一の対象が「子供」である所以です。

ところで、この詩人の代表作の一つに「陶酔の船」*Le Bateau ivre*がありますが、この「船」が、「女神」にして「母」なる「海」に抱かれて、大自然の「愛」と「美」に酔い痴れたランボオ自身を示すことはもはや見やすいでしょ

では、その系譜を、さらに詳しく見て行きましょう。以上からして、詩人ランボオの真の「母」は「アフロディテ」、つまりローマ神話の「ヴィーナス」(Venus の英語読み)であることは、ほぼ予測がつくのではないのでしょうか。先に挙げたラテン語詩と同じく、一八六九年の十四歳の時に書かれたものに、ルクレチウスの「物の本質について」*De rerum natura*の最初の部分を翻訳したものがあります。それは、詩人シュリー・プリュドンムが翻訳した「物の本質について」*De la nature des choses*に、ランボオが手を加えたものだと言われますが、問題はそのようなことではなく、その題が「ヴィーナスを祈る」*Invocation à Vénus*であったことです。その冒頭の部分を見てみましょう。

Mère des fils d'Enée, ô délices des Dieux
 Délices des mortels, sous les astres des cieux,
 Vénus, tu peuples tout: l'onde où court le navire,
 Le sol fécond: par toi, tout être qui respire
 Germe, se dresse et voit le soleil *lumineux* !

アエネアスの子らの母は「神々」の喜悅ぞ
 人の喜悅ぞ。御身ヴィーナスは天の星々の下
 すべての所に物住まはせ給ふ。水の上に船走り
 土地肥沃なりて、息づく物すべて御身のお蔭で
 芽ばえ丈伸びて輝く太陽を見るかな。

「アエネアス」は、「アフロディテ」の子で、ローマ建国の英雄。従って、「アエネアスの子ら」はローマ人のことです。それにしても、「ヴィーナス」とは、このように地球を司るほどの女神なのではないでしょうか。勿論です。それどころか、本来は宇宙全体を支配する力なのです。そこで彼は、「初期韻文詩」の第三作「太陽と肉体」*Soleil et chair*ではもはや己の心を抑えきれず、大胆にもこう告白したのでした。

Je crois en toi! je crois en toi ! Divine mère,
 Aphrodité marine ! — Oh ! la route est amère
 Depuis que l'autre Dieu nous attelle à sa croix;
 Chair, Marbre, Fleur, Vénus, c'est en toi que je crois !

われ御身を信ず、御身を信ず、神なる母、

(我々の)に至っては枚挙にいとまがありません。そして最後に、「地獄時代」*Une Saison en enfer*の「錯乱 その一 狂える処女 地獄の夫」*Délires I Vierge folle L'Epoux infernal*において、この「二人」の関係が初めて明らかにされました。それは一見まことに奇妙で分かりにくい物語ですが、「狂える処女」(元のランボオ)が「地獄の夫」(理想の男である新しい自分)との関係を告白する形式で語られます。それによれば、「夢」を求めて「狂気となった処女」が、もう一人の、その後も「夢」を追い続ける「夢」そのもののような「夫」に従って、どこまでも付いて行った所は、まさに「地獄」そのものでした。その挙句に、この命がけの「道行き」は、自分の《*Délires*》(錯乱)の一つであると結論づけられて、最後には《*Drôle de ménage*》:「おかしき夫婦ぞ」と、自分を笑ったのです。振り返ってみれば、まことに「地獄の青春時代」(*Une Saison en enfer*)でした。この作品は、自分の短い生涯を清算するために書かれたもので、「ハムレット」の人生は終わったのです。

今回はランボオの「両性具有」について、その成り立ちの過程から順に見てきましたが、そもそも何故「両性具有」なのでしょう。今や更に歩を進めて、それを問わねばなりません。そこで、先ほど言及した「両性」の「『パン』の息子」に戻って、もう一度考えてみましょう。《*Pan*》(パン)は言うまでもなく、ギリシャ神話の《*Le dieu des bergers*》(*Petit Littré*):「羊飼いの神」(仏々辞典)であり、これを日本では「牧神」と訳しましたが、《*Il personnifia dans la suite le Grand Tout, la Vie universelle*》(*Petit Larousse*):「その後、『普遍的生命』である『大いなるすべて』の化身となった」(仏々辞典)とされます。小文字の《*pan*》が、接頭語として「すべて」を意味することは、誰でも知っているでしょう。この「パン」が男神であることは、言うまでもありません。しかしながら、同じギリシャ神話の中に、正しく「両性具有神」なるものが存在したのです。それが「ヘルマフロディトス」(ラテン語では *Hermaphroditus*)であり、普通名詞の《*hermaphroditus*》も、「両性具有者、雌雄同体動物、両性花」を指す言葉となっています。しかも、この「両性具有神」は、実は「パン」の父である「ヘルメス」(*Hermes*)と「アフロディテ」(*Aphrodite*)の間に生まれたので、文字通り《*Hermes + Aphrodite = Hermaphroditus*》(ギリシャ語ではヘルマフロディトス)なのでした。一方、詩人はすべて、「汎神論者」(*panthéiste*)と言われます。ですから、ランボオは二重の意味で「Panの神(神々)の子」と言ったに違いありません。「すべて(パン)の神々の子」であるランボオは、「男神」の子(男)であると同時に、「女神」の子(女)でもあるのです。彼の「両性具有」は必然と言えるでしょう。

「慈悲」に基づく使命感が原動力となっており、特にこれ以後は、それが明確に自覚されて、自らを発狂の一步手前まで追い込んで行きました。恐らくは、「大驚」に「肝臓」を啄まれる苦痛を想いながら。

では、ここで先の「オフェリア」へ戻りましょう。もう一人の「詩人」は、なぜ「新しい自分」になるのでしょうか。

Ciel ! Amour ! Liberté ! Quel rêve, ô pauvre Folle !
Tu te fondais à lui comme une neige au feu :
Tes grandes visions étranglaient ta parole
— Et l'Infini terrible effara ton œil bleu !

天、愛、自由か。何たる夢ぞ哀れなる「狂女」よ。
汝の彼（其）に溶けしは雪の火に溶くが如くなりて、
汝大いなる幻を見て言葉出でざりき
— 而して汝の青き眼は恐ろしき「無限」に怯えぬ。

この《lui》（彼）は、《rêve》（夢）のことであり、それはまた《Ciel》（天）、《Amour》（愛）、《Liberté》（自由）そのものです。これが、オフェリアにとっての「彼」、つまり「ハムレット」なのでした。そこで、一年後に、その理想を体現した「ハムレット」になるのが、新しく生まれたランボオ自身に外なりません。要するに、詩人オフェリアと詩人ハムレットは、どちらも同じランボオで、二人は一心同体なのです。

さて、一八七一年の五月に「『予見者』の手紙」を書いたランボオは、その後間もなくパリに出ました。そして、この「彼女」と「彼」は、安下宿で「所帯」（ménage）を持ったのです。それが「若夫婦」*Jeune Ménage*であり、そこに生まれたのが、かの「イリュミナシヨン」*Les Illuminations*と「後期韻文詩」*Derniers Vers*に外なりません（「若夫婦」は、*L'Interprétation des Illuminations* IIIで解釈）。しかも、その「イリュミナシヨン」の中で、「古代」*Antique*を再現して、自ら《*fil de Pan*》：「『パン』の息子」と称し、《*Ton cœur bat dans ce ventre où dort le double sexe*》：「心臓の鼓動するは、その両性の眠れる体内ぞ」と、おのれの「両性具有」を暗示したのでした。その他「小楽節」*Phrases*の、《*Quand le monde sera réduit en un seul bois noir pour nos quatre yeux étonnés*》：「世界が、我ら四つの驚きたる眼の前で、ただ一つの暗き森に還る時」のように、「イリュミナシヨン」の中にはこの「二人」を示す表現がかなり見られ、《*nous*》（我々は）や《*notre, nos*》

へども、その言霊の活動を休止されたことがないのである。万一、一分間でも、その活動を休止したまふことあらば、宇宙はたちまち遺滅し、天日も、太陰も、大地も、列星もたちまちその中心を失ひ、ついには大宇宙の破壊を来すのである」(第四巻、卯の巻)。この「父音」(ふおん)は、「父」が「天」のことであり、縦の「アオウエイ」を指します。また、「母音」(ぼおん)は、「母」が「地」のことであり、横の「カサタナハマヤラワ」の列を指しています。ここで、ランボオの「太陽と肉体」*Soleil et chair*の一部を、前以って挙げておきますが、そこには驚くべき共通性があることが分るでしょう。

Et tous ces mondes-là, que l'éther vaste embrasse,
Vibrent-ils aux accents d'une éternelle voix ?

広漠たる天空の抱くこれらの天体は
すべて一つの久遠の歌声に打ち震ふや。

次に、以上のような「言霊説」は、日本だけでなく外国にもあることを思い出して下さい。それが新約聖書の福音書の「ヨハネ伝」であり、その冒頭の一句が、あの人口に膾炙した、《Au commencement était la Parole》:「初めに『言葉』ありき」に外なりません。旧約聖書の「創世記」の初めは、それ故、こう記されたのです。《Alors Dieu dit: "Qu'il se fasse de la lumière!"》:「その時『神』言へり、『光あれ』と。」では、もう一度出発点に戻しましょう。「詩人」は何故「創造者」なのか。つまりは、本来の「詩人」は「神」に近い存在であって、それは「神」から靈感を受けて、人間の進む未来の道を「創造する者」なのでした。古代ギリシャでは、詩人と、半神の英雄が最高の誉与である桂冠を戴いた所以です。

詩人は、かくして人類の先頭に立って進むが故に、一方で、その責任も大きく重いに違いありません。そこで彼ランボオは、先の手紙の中で、《Donc le poète est vraiment voleur de feu》:「それ故詩人は、まことに火を盗む者なのです」と、自らを「プロメテウス」に擬したのです。このプロメテウスは、人類の制作者とも解放者とも言われます。そこでランボオも、すぐ続けて、《Il est chargé de l'humanité, des animaux même》:「彼(詩人)は、人類を背負っているのです。さらには動物までも」と、全面的に責任を負う覚悟をしたのでした。この論の最初に、ランボオ独自の「慈悲」について話しましたが、それはプロメテウスの人類に対する「同情」と似たもので、いわゆる「憐れみ」などではないことが分かるでしょう。彼の創作活動は、このような

énormes, mais il faut être fort, être né poète, et je me suis reconnu poète》：「要は、全感覚の乱脈によって、未知なるものに到達すること。それが問題なのです。その苦痛は大変なものですが、強くあらねばならず、また生まれながらの詩人でなければなりません。しかも私は、自分がそのような詩人であることが分かったのです」と、精一杯の説明を行っています。どうも詩人とは何かの、自覚ないし認識にかかわっているようです。次に、もう一通の手紙（『予見者』の手紙）は二通ある）を見ると、同じ「私は他人です」のすぐ後で、《Si le cuivre s'éveille clairon, il n'y a rien de sa faute. Cela m'est évident : j'assiste à l'éclosion de ma pensée》：「真鍮が目を覚ましたらラッパであっても、まったく真鍮の責任ではありません。私には明白なのですが、私は自分の思想の孵化に立ち会っているのです」と、同じことを別な表現で語っていたのでした。従って、彼は、特に変わったことを言った訳ではないことが分かるでしょう。要するに、「今の私は、新しく生まれ変わったので、これまでの自分とは別人の私です」、ということなのです。それ故、先の「オフエリア」を見つめる「詩人」は、この新しい自分を予告するもので、狂気の自分を冷静に見つめる詩人としての、自分自身に外なりません。以後、この「二人」は、彼の中に共存することになります。

ここで、そもそも「詩人」(poète) とは何であるのか、それを問わねばならないでしょう。この《poète》は、ラテン語の《poeta》から来ており、それは更に、ギリシャ語の《poiêtês》が語源になっています。そして、この《poiêtês》は、「創造者」(créateur) という意味でした。では、「詩人」は何故「創造者」なのか。それを知るには、根源的な「神の創造」は如何に為されたかを知らねばなりません。

ランボオは、それを追求して、「母音」そのものに注目するに至りました。その時書かれたのが、彼の代表作として知られる「母音」*Voyelles* なのです。それは正しく「言霊」の世界と言えましょう。ここで、視点は再び「日本」に戻ることになります。言うまでもなく、日本こそは古来、「敷島の大和の国は言霊の幸はふ国」(万葉集) だからです。その「言霊学」とは、「言葉が現実を創造する」という考えであり、そこから江戸時代には、賀茂真淵が五十音図を神聖なものと考え、言霊学派は一つ一つの音節がそれぞれの意味を持つと主張したのでした。そして、これらの諸説を統合したのが出口王仁三郎(大本教の総師で、恐らくは日本最大の霊能力者)であり、その主著「霊界物語」の中で、宇宙の根源的な「創造」を伝えています。「宇宙万有一切を無限絶対、無始無終の全能力をもって創造したまひし独一真神なる大国治立尊は、最初に五大父音と九大母音を形成して天業を開始されて以来、今日にいたるまで一秒時とい

「これはシェークスピアのオフィリアなどではなく、Rimbaud Ophélie (オフィリアであるランボオ) とでも言うべきものである」(L'Interprétation des *Illuminations* II、同41号)、と申し上げたのでした。この「自由」を渴望する「子供」のオフィリアが、先の、「七歳の詩人」と全く同じであることは、容易に見て取れるのではないのでしょうか。だからこそ、詩人の彼女は「ロマンス」(抒情詩)を歌うのです。ところが、最後に一詩節(四行)のみの《III》があって、次のように全体を締め括っているのです。

— Et le Poète dit qu'aux rayons des étoiles
Tu viens chercher, la nuit, les fleurs que tu cueillis;
Et qu'il a vu sur l'eau, couchée en ses longs voiles,
La blanche Ophélie flotter, comme un grand lys.

— 而して「詩人」は語る、夜の星明りに
汝は己が摘みし花を探しに来ると。
また、長きヴェールを着け水の上に横たはり
白きオフィリアの、大百合のごと漂ふを見しと。

こちらの「詩人」は、一体誰なのでしょう。ここでも、前以って答えておきましょう。「それが問題である」(That is the question)と。

この作品は、一八七十年の五月に、詩人バンヴィルに送られた初期の三篇の一つでした。そして、それから丁度一年後の五月に書かれたのが、あの有名な『予見者』の手紙であり、その頃新しい自分に覚醒した彼は、この手紙の中で、《Je suis un autre》:「私は他人です」と一見奇矯とも取れることを言明したのです。その後この科白は広く知れわたって様々な解釈がなされましたが、肝心なことは、この部分だけを切り離して恣意的に論じるのではなく、手紙の文脈の中で意味を捉え、さらには彼の作品全体の中で理解することではないのでしょうか。そこで、その少し前を見ると、《Je veux être poète, et je travaille à me rendre voyant》:「私は詩人になりたいので、予見者になろうと努めています」と述べています。《voyant》(見る人)は、本来は聖書の「預言者」を指す言葉ですから、「未来を見る人」だと思われそうですが、「詩人になりたい」とは、彼は既に詩人なのですから、何を言っているのかよく分かりません。そこで彼自身も、「あなた」(手紙の相手)も何のことか分からないだろうし、自分にも説明できそうにないと言ってから、《Il s'agit d'arriver à l'inconnu par le dérèglement de tous les sens. Les souffrances sont

3 両性具有者

ここから論は、次の段階へ移ります。話が少し込み入りますが、彼が自分自身を「両性具有者」と見なしていたことは、これまでも繰り返し述べて来ました。しかし、それは以上のような「大自然崇拜者」と、どのような関連があるのでしょうか。その接点を示すのが、「初期詩篇」の第四作の「オフェリア」*Ophélie*です。

O pâle Ophélia ! Belle comme la neige !
Oui tu mourus, enfant, par un fleuve emporté !
— C'est que les vents tombant des grands monts de Norwège
T'avaient parlé tout bas de l'âpre liberté ;

蒼白きオフェリアよ、美しきこと雪の如し。
然り、子供の汝は河に運ばれ死ににけり。
そは、ノルウェーの高き山より風吹き下ろし
烈しき自由を汝が耳にそと囁きし為なり。

ここでも、「子供」と「自由」であることに注目して下さい。これが果して、あの有名なオフェリアなののでしょうか。ここは《II》の冒頭の一節ですが、その前の《I》の中で、次のように歌われているのを忘れてはならないでしょう。

Voici plus de mille ans que la triste Ophélie
Passe, fantôme blanc, sur le long fleuve noir,
Voici plus de mille ans que sa douce folie
Murmure sa romance à la brise du soir.

はや千歳を過ぎたるか、薄倅のオフェリアは
白き亡霊となりて暗き大河を流れ行く。
はや千歳を過ぎたるか、心優しき物狂いは
夕べの微風にロマンス（抒情詩）を呟く。

そこが「この世」ではなく、「冥界」であるのは明白でしょう。この詩の冒頭に、《l'onde calme et noir》（静かなる暗き川）とありますが、《l'onde noir》（暗き川）とは、「三途の川」を指すことも付け加えておきます。それ故、

音はもはや耳に響かず、我は手足の絶えざる苦痛にもはや苦しまざりき。我は好機を捉へて、すべてを忘れ楽しげなる田園に辿り着きぬ。勉学を離れて如何なる心配もせず、心地よき喜びが我が疲れたる心を休ませぬ。得も言われぬこの上なき嬉しさに心満ちて、退屈なる学校や教師の詰らぬ授業をば忘れたり。好みて彼方に野原を眺め、春の大地の喜びあふれる驚異を見たり。我は子供になりて、はや田園の当てなき散索の外は求めざりき。」

ランボオと言えば、二十前に天職の詩人さえも辞めて、ヨーロッパの文明社会を離れ、各地を放浪した後にアフリカへ去り、三十七歳で死んだ人です。しかし、その出発点と到着点を一目で見ると、ある意味では最初から最後まで同じだったことが分るでしょう。つまり、彼は生まれながらの「ナチュリスト」(naturiste)、即ち「大自然崇拝者」だったのです。従って、最初に挙げた「プロローグ」も、一言で言えば、大自然の愛そのものである「太陽」が沈みかけ、自然界の様々な植物群も次第に見えなくなる時を、この上ない愛惜の情で名残り惜しんでいる図なのでした。それ故、「七歳の詩人」もまた、先ほどのような真情の吐露の後で、こう打ち明けたのです。

A sept ans, il faisait des romans, sur la vie
Du grand désert, où luit la Liberté ravie,
Forêts, soleils, rives, savanes !

彼七歳にして物語を作りけり。

そ（物語）は森や、太陽や、海岸や、大草原など、
すばらしき「自由」に輝く無人の大地の生活なり。

「彼」ランボオは、この、自然と一体の「自由」を束縛するが故に、「母親」を「嫌悪」したのでした。更には、母親が代表する「キリスト教」も、キリスト教が代表する「ヨーロッパ文明」もです。それ故、彼は「母親」から逃げ、「キリスト教」から逃げ、「ヨーロッパ文明」からも逃げたのです。それは先ず心の中で行われて、詩人として、独自の「新しい世界」を作ろうとしました。しかし、この詩の「七歳」は本当かという疑問があるかも知れません。この「七」は、聖書によく出てくる数で、「完全」を表わすと言われます。例えば、「神」は六日で創造を終り、七日目に休んだので、一週間は七日で完結するという訳です。従って、「七歳」とは、「子供」の完成した姿を示すものと言えるでしょう。

ヴィル中学校では開校以来と言われた「神童」の顔でした。それは彼女を大いに喜ばせましたが、はたして彼の素顔だったのでしょうか。実は、その見かけに反して、彼の本心は全く別であったことを打ち明けたのが、先の「七歳の詩人」なのです。

Et la Mère, fermant le livre du devoir,
S'en allait satisfaite et très fière, sans voir
Dans les yeux bleus et sous le front plein d'éminence,
L'âme de son enfant livrée aux répugnances,

しかして「母」は義務の書を閉じて、
常に満ち足り、いと誇らしげに立ち去りにけり。
子の青き眼と秀でたる額の内に
心の烈しく嫌悪したるを見ずして

「義務の書」とは、教科書のことでしょう。ここで思い当たるのは、先の「プロローグ」でも、途中から勉強に対する嫌悪で収拾がつかなくなっていることです。例えば、こんなことも言っています。《Pourquoi — me disais-je — apprendre du grec, du latin? Je ne le sais. Enfin on n'a pas besoin de cela》:「何故ギリシャ語やラテン語を学ぶのかと、よく思った。何故なのか分からない。結局、そんなものは必要ないのだ。」しかし、ランボオは、人も知るラテン語の達人でした。そして実際に、フランス語の詩以前に、授業の「課題詩」として作詩されたラテン語詩が、今でも数篇残っているのです。そこで、その最初の「生徒の空想」*Le Songe de l'Ecolier*を、仏訳（プレイヤー版）で見てみましょう。この作品はホラチウスの詩に基づくため、よく体罰を受けた生徒（ホラチウスの回想）が突然ランボオ自身に入れ替ります。《le bruit des coups ne sonnait plus à mes oreilles, et la fêrule ne tourmentait plus mes membres d'une douleur continue. Je saisis l'occasion; je gagnai les riantes campagnes, oubliant tout... Loin de l'étude, et sans nul souci, de douces joies récréèrent mon esprit fatigué. Le cœur plein de je ne sais quel délicieux contentement, j'oubliais l'école fastidieuse et les leçons sans charme du professeur; je me plaisais à regarder au loin les champs et à observer les heureux miracles de la terre printanière. Enfant, je ne cherchais pas que les vaines flâneries de la campagne》:「(先生が病気になったので) 鞭を打つ

娘ヴィタリー・キューフと結婚しました。軍務のため殆ど別居生活でしたが、翌年の一八五四年に隣町のシャルルヴィルで生まれたのが先刻の詩人アルチュール・ランボオです。ランボオと言えば、ありとあらゆる解釈に包まれた謎の人物とされますが、彼はそもそもの初めから、そのような理解しがたい存在だったのでしょうか。先に答えてしまえば、ある意味では「然り」であり、ある意味では「否」でしょうが、ここは順に見ていかねばなりません。

そこで先ず、この詩人の出発点と思われる「プロローグ」*Prologue*を紹介しましょう。最初の習作と言われていますが、次のような、まことに不思議な書き出しになっています。《*Le soleil était encore chaud; cependant il n'éclairait presque plus la terre; comme un flambeau placé devant les voûtes gigantesques ne les éclaire plus que par une faible lueur, ainsi le soleil, flambeau terrestre, s'éteignait en laissant échapper de son corps de feu une dernière et faible lueur, laissant encore cependant voir les feuilles vertes des arbres, les petites fleurs qui se flétrissaient, et le sommet gigantesque des pins, des peupliers et des chênes séculaires*》:「太陽には、まだ温もりがあった。にもかかわらず、もはや殆ど地上を照らしていなかった。巨大な穹窿の入口の松明が天井をもはや微かな明りでしか照らさぬように、地球の松明である太陽はその火の体から最後の微かな明かりを洩らしながら消えかけていたが、それでもまだ木々の緑の葉や、生気をなくした小さな草花や、大木の松やポプラや柏の巨大な梢が見えていた。」先ず何よりも注目すべき点は、その外界の認識の仕方でしょう。かつて、「ランボオの第一の特徴は、私見によれば、その比類のない『宇宙感覚』にあると言ってよい」(「ランボオと聖書」)と申しましたが、その宇宙的なスケールの認識が最初からはっきりと示されているのは、やはり驚くべきことではないでしょうか。結論から言えば、「そこには、地上に降りた『使者』の幼き姿が、見える人には見えるであろう。それは如何にも唐突な物言いではあるが」(*L'Interprétation des Illuminations* III, 同43号)、ということです。それにしても、どのような子供が、このようなものを書いたのでしょうか。もう一度、その家庭に戻ってみましょう。

2 ナチュリスト (大自然崇拝者)

彼の母親は、カトリックの大変熱心な信者でした。彼女が留守宅を守るために、どれほど厳格に一家を取りしまったかは、様々なエピソードもあり、想像するに難くありません。その時、子供の彼が最初に見せた「顔」は、シャルル

ていたのである。」特に、『初期詩篇』 *Poésies* には、他に例を見ないランボオ特有の《la charité》（慈悲）が随所に見られて、これが彼の大きな魅力となっている（それは普通の憐れみとは異質のもので、これがランボオを解く「鍵」となるであろう）。そして、「そのような彼の『慈悲』の対象になったのが、要するに『子供』であり、『女』であり、『労働者』なのであった（いずれも人間社会の「弱者」である）」（「ランボオと聖書」, 「文芸と思想」56号掲載）、ということです。そこで、改めて問いましょう。何故、「子供」と「女」と「労働者」は、人間社会の「弱者」なのか。その答えが、先の「レ・ミゼラブル」の巻頭の言そのものに外なりません。即ち、《Tant qu'il existera, par le fait des lois et des mœurs, une damnation sociale créant artificiellement, en pleine civilisation, des enfers, et compliquant d'une fatalité humaine la destinée qui est divine; tant que les trois problèmes du siècle, la dégradation de l'homme par le prolétariat, la déchéance de la femme par la faim, l'atrophie de l'enfant par la nuit, ne seront pas résolus; tant que, dans certaines régions, l'asphyxie soiale sera possible; en d'autres termes, et à un point de vue plus étendu encore, tant qu'il y aura sur la terre ignorance et misère, des livres de la nature de celui-ci pourront ne pas être inutiles》：「法と慣習によって社会的な厳罰が存在して、文明の只中に人為的に地獄を作り出し、神聖なる運命を人間社会の不運で難しくしていること。男は下層階級（労働者）であるために墮落し、女は飢えのために頹廃し、子供は（周囲の）暗闇のために（日が射さず）衰弱するという、当世の三つの問題が解決されていないこと。ある地域では、社会的な窒息状態（経済的停滞による貧窮）が有り得ること。更に広汎な観点から換言するならば、地上に無知と悲惨がある、その限りは、この類の書物も無駄ではないかも知れない」（カッコ内は筆者の補足説明で、以下同様）。では、ユゴーに共鳴するランボオ自身は、どのような環境に生まれ育ったのでしょうか。

先程のような歴史の大きな流れの中で、民意によって大統領に選ばれたルイ・ナポレオン（ナポレオン一世の甥）は、一八五二年にクーデターを行って帝政を宣布し、ここにナポレオン三世の誕生となりました。かくして、「第二帝政」が始まりましたが、はたして「皇帝」が民衆の味方になるのでしょうか。その在位中、「産業革命」は大いに発達しましたが、底辺の労働者の境遇は、さして変りはなかったのです。

そのナポレオン三世が即位した次の年、配下の陸軍大尉フレデリック・ランボオが、フランス北東部のアルデンヌ県メジエールに駐屯中、県内の小地主の

宇宙の「ワンダラー」

— ランボオは何者か —

中 村 弘

《Silences traversés des Mondes et des Anges》(Voyelles) : 「『天体』と『天使』のよぎりし沈黙の世界」(ランボオの「母音」より)。今回の舞台を、宇宙語で「サラス」(悲しみの惑星)と言います。宇宙の片隅の、ある銀河系の、周辺近くにある太陽系の、一惑星です。さらにフォーカスしましょう……。

1 「プロローグ」

天明三年、浅間山が大爆発。その時、東北地方を始めとして日本全国を大々的な飢饉が襲いました。世に言う「天明の大飢饉」です。それから六年後の西暦一七八九年に、今度は地球の裏側で「大変革」(La Révolution)が起きました。いわゆる「フランス大革命」であり、その「激震」は世界を走ったのです。そこには一見、何の関連もありません。しかし、実は浅間山の大噴火によって、噴煙は成層圏に達して、北半球に異常気象をもたらしたのです。そのため、フランスでは小麦が不作となって、フランス革命の要因になったと言われています。

その後のフランスは、「産業革命」から「帝国主義」を目ざす資本家たちと、本来の革命の理念を志向する一般国民の間で、熾烈な抗争が繰り広げられて行きました。つまり、社会の下層には、相変らず「レ・ミゼラブル」*Les Misérables* (悲惨な人々)が存在したのです。

この大長編は一八六二年に刊行されましたが、九年後の一八七一年にこれを絶賛したのが、当時弱冠十六歳の詩人ランボオでした。《*Les Misérables sont un vrai poème*》(lettre du Voyant) : 「『レ・ミゼラブル』はまことの詩です」(「予見者」の手紙)。一体、何が彼の琴線に触れたのでしょうか。それはこれまでの論でも述べたことですが、「彼の『七歳の詩人』*Les Poètes de Sept ans*」などが示しているように、幼い頃より既に、人類の悲惨に心を痛め